

## S.R. Clegg の組織エコロジー観

村 上 伸 一

### 1. 序

精力的な研究活動を続ける Stewart R. Clegg が、Clegg (1990, chap. 4) で組織エコロジーについての考察を批判的に展開している。組織エコロジー批判はこれまでも諸論者によって様々な角度からなされ (例えば、Miles, 1982 ; Perrow, 1986 ; Young, 1988), Hannan & Freeman (1989 a) によって反論もなされているが、諸批判の中で最も包括的で綿密な Young (1988) はあまり言及されないことが多いようだ<sup>(1)</sup>。

後に詳述するが、Clegg (1990) は Young にかなり依拠しながらエコロジー批判を展開している。この点で、彼の批判的考察に注目する価値を私は見出す。というのは、既に検討したように (村上, 1991ab), Young の批判は誤りが少なく、それだけにエコロジーの今後の発展に寄与するところ大であるように私には考えられるからである。Young を正当に評価するようである Clegg (1990) を一顧だにせず無視する理由は私には何もない。

小稿の目的は、Clegg (1990) の組織エコロジー観を明らかにすることにある。すなわち、彼の組織エコロジーについての批判的検討のもつ意義と限界を明らかにすることが、以下で試みられる。

### 2. Clegg (1990) の組織エコロジー観

Clegg (1990, chap.4) は、Hannan & Freeman (1977, 1984) を中心にして組織エコロジーを要約した上で、その批判を行った Young (1988) をとり上げて組織エコロジーの吟味を行う。Young (1988) についてコメントする論者は少ないだけに、Clegg の吟味にはまずこの点において興味がそそられる。本節では、この Clegg のエコロジーについ

での検討を簡潔に要約しよう。

Young による組織エコロジー批判の最初の点は、組織の「個体群」に関する論述部分に向けられた。彼女によれば、Hannan & Freeman はそれに組織の「種」を意味させるようだが、生物学において種とは1つの形態の集合であり、異種交配させ得るもの、すなわち遺伝子プールを構成するものなのである。したがって、種を意味させようと個体群という言葉を使うことは混乱を招く、というのが Young の批判となる。Clegg は Young の批判に同意し、確かに、Hannan & Freeman(1977, p.935) によるフォーマル構造の相違と種の相違の同等視には、不正確な示唆が含まれていると考える。

次に、「ニッチ」というエコロジーの用語の採用に関する問題に Clegg は筆を進める。彼によれば、エコロジーではニッチの概念は通常、「ある種を維持するのに十分な抽象空間上の一組の諸制約」(Young, 1988, p.5)の観点から定義され、あるニッチの発生には制約があることを典型的に意味する考えなのである。もしそうでなければ、ニッチ空間を求めてのどんな競争も存在しないだろう。しかし、残念ながら寄生生物の分野では、市場としてのニッチの明示的な概念化を図ると、その制約が何であるかが不明瞭になるのである。すなわち、一見したところ全く無益なもののためにさえ、市場はほとんど無限の拡大が可能であるようなのである。

ニッチばかりでなく、他の定義上の本質的な問題も生じている、として次に Freeman (1982, p.9) がとりあげられる。Freeman は種は異なる研究のために様々に定義されるべきだと述べるが、そうした戦略はまた制約の問題を生じるだろう、と考える Young に Clegg は同意する。すなわち、Freeman の主張は同じ種が自由に特定のニッチ空間の限定を超えることができることを意味するのか。あるいは、組織は容易に再定義を受け容れやすいということの意味するのか、という疑問が提起されるのである。このことと関連する問題は「種の変化」や「種形成」の概念で生じると Clegg は述べ、テクノロジーに言及する。

よく知られていてよく批判される「技術決定論」の中で (Clegg & Dunkerley, 1980)、テクノロジーは自律的で外生的 (exogenous) で決定する変数として捉えられるようだ (例えば、Brittain & Freeman,

1980, pp.295-6)。しかし、Clegg によれば、テクノロジーが明らかに中立的で自律的な変数ではないという見解も存在しているのである。

組織エコロジーには分析レベルの混乱もある、と Clegg は述べている。彼によれば、Hannan & Freeman が消滅率について言及しているように、組織は一つの種を「やめる」ことができることを組織エコロジーは概念化しているという。自然の種の世界では、死は組織の世界とは違って、通常あいまいではない。Young (1988, p.8) が示唆するように、エコロジー・モデルでは、組織形態のほとんどどんな変化もその形態の「死」と何か新しいものの「誕生」に相当するものになる。したがって、そこにエコロジー・モデルの組織内部過程の概念化における静止状態に対する偏見と Young (1988, pp.8-10) が明らかにする変化の概念化における混乱とがみられる、というのが Clegg の見解である。

彼によれば分析レベルの問題は、理論の対象が種のメンバーではなく種そのものであるという原則からエコロジーのメタファーが引き出されていると考えられる場合に生じる。そうしたメタファーの使用は拡張されたエコロジーのメタファーのアイロニカルな可能性を引き出して、Young (1988, pp.10-16) が着目するように、寄生先にエネルギー源をおいだし、追加的なエネルギーをどこかで引き出す、寄生生物の半生活を楽しむようなのである。彼にいわせれば、引き出された仮説は寄生生物を生存させる養育プロセスのようなハイブリッドである。寄生生物的使用はメタファーを維持するが、種概念にそれを適用しない。すなわち、メタファーは意識的に構成され分析的で抽象的な「理論の対象」としての種概念に適用されないのである。

エコロジーの観点から、あたかもそれらが種のような抽象概念に類推されるかのように現実の存在を扱うことは誤りである、と Clegg は述べる。特定の経験的对象——組織——の誕生と死は、理論的对象として構成されている推定上の種の誕生と死を知らせるものではないのである。

次に、Clegg は再び Young (1988, p.12) の疑問を引用する。

最も小さな昆虫や金魚や森ネズミは独立したアクターであるが、最も大きい Sears Roebuck の支店は自身の運命について何もいえない。支店や提携組織、関連組織、政府機関を独立したアクターのように研

究することは、一匹のカエルとは無関係にカエルの足を研究することに似ていないのか。

最も小さな昆虫はもちろんのこと、金魚、森ネズミあるいはカエルも、様々な人間と管理の形態に具体化すれば、競争ししばしば矛盾する支離滅裂な合理性により現実の有機的な行動が決定されるアリーナをコントロールしようとして戦う一つの機関 (agency) ではないことに人々は気がつくだろう。あたかも矛盾、あいまいさ、そして対立のない統合的、有機的でインスティンクティブな実体であるかのように経験的に運営できるのは、事実希れな組織なのである (Clegg, 1989)。

この他にも、例えば、経験的研究が全く検討されていないことなど、組織エコロジーにはいくつかの大きな問題が残されていると Clegg は述べるが、ここではこれ以上具体的に論じないとする。

最後に、Clegg は Chandler (1962) と Williamson (1975) の「市場」視座を想起する。Chandler は多角化を強調し、一方 Williamson は規模を提起するが、彼らの視座は重要な環境の圧力としての「競争」を強調する説明の 1 つの軸であると Clegg は考える。そして、もう 1 つの軸が、これまで吟味してきたエコロジーの視座なのである。彼によれば、この 2 つの視座の説明の鍵は、ニッチか市場構造あるいは規模の制約かに対する効率的適応なのである。この点では、これらのモデルはおおよそ組織に対する Max Weber の見方にほど遠いけれども、それらは Weber の分析から受け継いだ知恵、ただし正しくない知恵をもつ 1 つの類似性を共有している、と彼は考える。それは効率を強調することであるというのが、Clegg のくくり方なのである。

### 3. Clegg (1990, chap.4) の意義と限界

Clegg (1990, chap.4) の組織エコロジーの批判的検討を前節で要約的に紹介した。本節では、彼の検討についての考察を行い、その意義と限界を明らかにしたい。

既述の通り、Clegg は Young (1988) をとりあげながら組織エコロジーの吟味を行った。Young (1988) については、それについての応答

(Brittain & Wholey, 1989; Hannan & Freeman, 1989b) とそれに対する返答 (Young, 1989) を含め、私も検討を加え (村上, 1991a), 多くは誤っていない指摘であるように考えた (村上, 1991ab)。したがって、ここでは Young (1988) を詳しく紹介することはしない。あくまでも、Clegg の吟味についての検討に必要な範囲で言及するに留める。

Young は第 1 に、種と個体群との同一視を混乱を招くものと批判する。Clegg はこの批判に同意する。私も Young の批判が誤っているとは考えない。ただし、村上 (1991ab) で検討したように、Hannan & Freeman (1989ab) の今後の展開に期待を抱いていることは付加しておかなければならない。

次にニッチの問題である。ニッチは制約の観点から定義されなければ、その考えが成立し得ない (Young, 1988, p.5)。しかし、ニッチを市場のケースで捉えようとするれば、市場は国内的にも国際的にも拡大し得る。何ともあいまいさを残す考えであることが Young によって提起される。Clegg はここでも彼女のエコロジー批判を異論なく受容していると認められる。私も Clegg の姿勢と同様である。

第 3 に、テクノロジーに関する問題であるが、これは Young (1988) が指摘する種形成の問題である。Young は Brittain & Freeman (1980) をつきつめれば、新しいテクノロジーが新しい組織を生み出すことになるとし、そういうことは変化を明らかにするかもしれないが、どのように人間なり組織がそうした技術変化を、そしてそれ故新しい種である組織を生み出すのかを説明しない、と批判するのである。Clegg の言い換えは、若干誤解を招き易い点もあるが、Young のこのような批判の肯定であると判断される。この点についても、私は Young の批判が全く誤りに満ちているとは考えない。したがって、Clegg の検討に限界を見出すことはできない。

第 4 に、Clegg はエコロジーには分析レベルの混乱があると指摘する。しかし、彼の問題のくくり方はわかりにくいのではなからうか。彼の考察は、Young が批判する「誕生と死」、更に「慣性と変化」へと展開しているからである。したがって、彼の議論の中味は誕生と死、そして変化に関する Young の考察を跡づけし、彼女の批判を受容するというものである。この点、私として特に評価上のコメントをするものはない。

第5に、Cleggはエコロジーのメタファーに関する問題に言及する。この点も、彼は分析レベルの問題に関連させて論じ始めるのだが、なぜ分析レベルの問題なのか幾分わかりにくいかもしれない。彼の考察は、Youngの「生物学モデルと個体群理論」に関する議論に即したものであるが、Cleggの表現は理解しにくいように思われる。Youngがここで批判したのは次のようなことなのである。生きている有機体の間では、個々のメンバーはいつでも生まれ死んでゆき、それらの種の他のメンバーに入れ替わられる。しかし個々のメンバーの誕生と死は種の誕生と死を告げるものではない。様々な環境条件下で有機体の種が生存したり絶滅したりすることの考察に類似する議論である。組織の種における誕生、死、そして変化に関する議論がエコロジーの理論には欠けているのが苦しいところである。以上のようにYoungの指摘は端的でわかり易い表現になっている。ところが、これをCleggの言葉にすると、前述のように難渋な表現になるのである。

第6に、CleggがYoung(1988, p.12)を引用する議論の検討に入ろう。この点も、Cleggの表現はわかり易いものではないと考えられる。Youngの議論は「独立」という項目のものであり、次のような内容である。生物学の理論は、種のメンバーは植物であれ動物であれ、フリーなアクターであると仮定している。しかし、今日の多くの企業は支店をもち、支店は本部から命令を受けている。多くの地方のボランティア組織は全国組織のメンバーであり、国の規制の制約下にある。したがって、独立した単位、分析のために展開されたモデルをより高い階層の組織に活動や構造を制約されている組織に使用できるのか、という問題提起がなされるのである。

以上のようなYoungの説明に、支店組織に焦点を当てるまでもなく、現実の組織は一つの有機体のように統一がとれることは少なく、矛盾やあいまいさに満ちたものなのであり、統一的で有機的なアクターを説明する理論から単純に類推などできるものではない、というCleggの見解が独自に加えられている。彼の独自の見解が加えられたことで、Youngのエコロジー批判が一層明瞭になったのだろうか。私には、整理が必要であるように考えられる。

支店が独立して行動したら、まさに1つの組織として統一などなく、

1つの組織とは認められまい。支店が本部の命令下にあるから、1つの企業組織なのである。こうした一般論に基づく Young の批判は、受容されやすいと考えられる。しかし実は、この一般的見解に Clegg の付加する見解が疑問を投げかけるのである。Clegg は恐らく、自身の見解と Young の考えがこのように矛盾をきたすものだとは考えなかったであろう。しかし、彼の意図とは無関係に、結果的に彼の見解は Young の議論に対し考究すべき問題を提起したのである。貴重な貢献といえよう。

更にもう一点、法的規制等の社会的環境あるいは制度的環境にかかわる問題も Young によって提起されていた。この点で、企業組織の独立性に関する制約を指摘するのは、その程度をどのように考えるのか、という面は残るが誤った指摘ではないと考えられる。しかし、動物の場合に限らず植物の場合にも、それに類似した環境上の制約は考えられるのではないのだろうか。私には、組織理論を進展させようとする観点からは、シャープに的を射抜くような指摘とは考えられないのである。

最後に、Clegg は Young (1988) から離れ、Chandler と Williamson を想起しながら、組織エコロジーを全体的な視野から位置づける。両者は、Weber の「正しくない知恵」をもつという点で類似している、と彼は考える。彼のいう正しくない知恵とは効率である。

彼は「効率的適応」という言葉も使用しているが、こうした彼のエコロジーの位置づけは、今や誤謬であるといわざるを得ない。既に検討したように (村上, 1991a, 1993), Hannan & Freeman (1989a, chap.2) は組織個体群における選択が常に効率的な組織を好むとは考えていない、と表明しているからである。エコロジーの最大の鍵概念は「生存」にある。この存続と効率はパラドキシカルな関係にある場合がしばしばみられるのである。仮にそうした発言を把握した上で、Clegg が既述のように位置づけしたところにこそ着目しなければならないとしても、私の評価はほとんど変わらない。というのは、仮に彼が把握していたのなら、そうした議論に触れない姿勢こそ問われるからである。いずれにせよ、彼の位置づけに関する主張は正確なものではないと考えられる。

この効率をどのように考えるか、は既に考察してきたように (村上, 1991ab), エコロジーを考究する上で、とりわけ、エコロジーの今後、更にはこれからの組織理論の展開方向を考える上で極めて重要な地位を占め

ていると考えられる。このような重要な問題を、単純というよりも幾分粗くエコロジーに関して片づけてしまった Clegg (1990) には是非とも再考の上、新たな議論展開を期待したい。

#### 4. 結

以上、Clegg (1990, chap.4) の組織エコロジーに関する批判的検討に対する考察を行い、その意義と限界を明らかにした。最大の意義は、Young (1988) を正当に評価し、自身の検討に十分に組み込んだ点である。しかしながら、この意義は同時に、Young への「依拠」を超え、単なる紹介と同意という限界の指摘につながりかねない危ない方向を向くようでもあった。最大の限界は、効率という概念でエコロジーをくくろうとした点である。知的刺激に満ちた研究活動を続ける Clegg にはこの点で、新たな議論展開を望みたい。その時に恐らく小稿のもつ意味も課題と共に現実のものとなろう。細部については繰り返さない。

Young に依拠した Clegg も彼女同様、組織エコロジーに対して、生物学モデルの組織理論への単純な適用という批判を行う。極めてわかり易い批判であり、誤りであるともいえない。しかし、既に検討を加えたように (村上, 1991a)、Young に対する Hannan & Freeman (1989b) の反論の方を私は評価したい。新たな組織理論の前進のために、種々の困難に立ち向かう側の努力をこそ第一に評価すべきであると考えからである。

Clegg (1990) はモダンとポストモダンの組織論に関する議論の中で一定の評価がなされているように思われる (e.g., Scott, 1992, chap.11)。いうまでもなく、小稿は Clegg (1990, chap.4) の組織エコロジー観にのみ考察範囲を限定し、そこで彼のエコロジー観の意義と限界を明らかにした。意義と限界の両者が見出されたことは、彼のエコロジーに関する議論の健全性と今後の発展性を示すものであろう。

私は、Hannan & Freeman という組織理論上の開拓者の努力こそ第一に評価すべきであると述べた。しかし、その次に評価されるべきは、開拓者たちの研究に対する真剣な検討であり批判である。この意味で、Young 同様、Clegg の批判的検討も組織エコロジーに貢献し、ひいては



組織理論全体の発展に寄与することになることを私は期待している。

注

- (1) 恐らく Young (1988) の組織エコロジー批判には、批判後の「望ましいエコロジー像」が見えにくいからである。批判の対象であり廃絶の対象であるというのと、批判の対象であり一層の発展を期待する対象であるというのとは異なる。Young は幾分前者のような傾向がみられるのだろう。少なくとも私は後者であり、小稿執筆においてもこの姿勢は一貫している。

参考文献

- Brittain, J.W., & Freeman, J. 1980. Organizational proliferation and density dependent selection. In J. Kimberly, R.H. Miles, and associates (Eds.), *Organizational life cycle: Issues in the creation, transformation, and decline of organizations*:291-338. San Francisco: Jossey-Bass.
- Brittain, J.W., & Wholey, D.R. 1989. Assessing organizational ecology as sociological theory: Comment on Young. *American Journal of Sociology*, 95: 439-444.
- Chandler, A.D. Jr. 1962. *Strategy and structure: Chapters in the history of the American industrial enterprise*. Cambridge, MA: MIT Press.
- Clegg, S.R. 1989. Radical revisions: Power, discipline and organizations. *Organization Studies*, 10: 97-115.
- Clegg, S.R. 1990. *Modern organizations: Organization studies in the postmodern world*. London: Sage.
- Clegg, S.R., & Dunkerley, D. 1980. *Organization, class and control*. London: Routledge.
- Freeman, J. 1982. Organizational life cycles and natural selection processes. In B.M. Staw and L.L. Cummings (Eds.), *Research in organizational behavior*, vol. 4: 1-32. Greenwich, CT: JAI Press.
- Hannan, M.T., & Freeman, J. 1977. The population ecology of organizations. *American Journal of Sociology*, 82: 929-964.
- Hannan, M.T., & Freeman, J. 1984. Structural inertia and organizational change. *American Sociological Review*, 49: 149-164.

- Hannan, M.T., & Freeman, J. 1989a. *Organizational ecology*. Cambridge, MA : Harvard University Press.
- Hannan, M.T., & Freeman, J. 1989b. Setting the record straight on organizational ecology : Rebuttal to Young. *American Journal of Sociology*, 95 : 425-439.
- Miles, R.H. 1982. *Coffin nails and corporate strategies*. Englewood cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- 村上伸一, 1991a. 「組織エコロジー論争」, 『北星論集 (経済学部)』, 28 : 85-118。
- 村上伸一, 1991b. 「組織エコロジーのマネジリアル・インプリケーション」, 『組織科学』, 25 : 67-77。
- 村上伸一, 1993. 「組織の適応と組織エコロジー」, 『北星論集 (経済学部)』 30:115-144。
- Perrow, C. 1986. *Complex organizations : A critical essay*, 3rd ed., Glenview, IL : Scott Foresman.
- Scott, W.R. 1992. *Organizations : Rational, natural, and open systems*, 3rd ed., Englewood Cliffs, NJ : Prentice-Hall.
- Williamson, O.E. 1975. *Markets and hierarchies : Analysis and anti-trust implications*. NY : Free Press.
- Young, R.C. 1988. Is population ecology a useful paradigm for the study of organizations? *American Journal of Sociology*, 94 : 1-24.
- Young, R.C. 1989. Reply to Freeman and Hannan and Brittain and Wholey. *American Journal of Sociology*, 95 : 445-446.

# S. R. Clegg's View of Organizational Ecology

Shinichi MURAKAMI

Organizational ecology is a prominent current paradigm in the study of organizations. Recently it has been subject to some critical scrutiny by S. R. Clegg. According to his argument, the key to explanation for this paradigm is that of efficient adaptation: whether to niches, market structures or size constraints. In this paper I question this argument. I do not think that organizational ecology stresses efficiency. This paper also attempts to clarify the meaning of his critical scrutiny. I expect that his argument will contribute to the development of organization theory.